

平成三十年度

第二十八回島根県雲南市

「永井隆平和賞」入賞作品集

島根県雲南市教育委員会

もくじ

小学生低学年の部

最優秀賞 平和のもとで心をつなげていく

優秀賞 人をたすけるって いいな

佳作 「如己愛人」の精神から学んだこと

佳作 あたり前じゃないしあわせ

島根県・雲南市立三刀屋小学校

島根県・雲南市立三刀屋小学校

島根県・雲南市立鍋山小学校

島根県・雲南市立掛合小学校

狩り 野の
飛ぶ
湊 みなと 敦 あつし

石 いし 飛 とび

伊 い 東 とう 奈 な

中 なか 村 むら 楓 ふう 花 か

小学生高学年の部

最優秀賞 ぼくと祖父と博士

優秀賞 人を愛する気持ち

佳作 笑顔のプレゼント

佳作 平和の基になる言葉

島根県・雲南市立木次小学校

島根県・雲南市立西日登小学校

島根県・雲南市立吉田小学校

島根県・雲南市立阿用小学校

村 むら 尾 お 拓 たく 真 ま

田 た 中 なか 鼓 こ 春 はる

大 おお 家 え 凛 りん

勝 かつ 部 べ 瑛 えい 資 すけ

中学生の部

最優秀賞 壁の外側で

優秀賞 平和を思う

佳作 繋ぐ平和

佳作 平和とは

佳作 如己愛人ゝ生きてこそゝ

広島県・ノートルダム清心中学校

山口県・下松市立久保中学校

沖縄県・八重瀬町立東風平中学校

島根県・雲南市立三刀屋中学校

広島県・盈進中学校

谷たに 成なる 葉は

久ひさ 武たけ 梨り

伊い 禮れい 彩あや 花か

岩いわ 崎さき 大だい 地ち

酒さか 見み 知とも 花か

高校生の部

最優秀賞 八月九日に生まれて

優秀賞 私たちは平和を手に入れられるのか

佳作 モノのカタチ

佳作 私たちの本能

神奈川県・桐蔭学園高等学校女子部

東京都・東洋英和女学院高等部

島根県・島根県立松江南高等学校

東京都・東洋英和女学院高等部

二ふたつ 木ぎ 理りさこ 子こ

横よこ 山やま 公きみ 香か

浅あさ 野の 葉かん 菜な

油あぶら 木き 理りおな 緒奈

一般の部

最優秀賞 60年前の手紙から

優秀賞 イランで考えたこと

佳作 祖父の願いを未来へ

島根県

島根県

島根県

狩か 野の 典のり 彦ひこ

山やま 尾お 一いち 郎ろう

和わ 久く 利り 裕ゆう 大た

◆ 小学生低学年の部 ◆

最 優 秀 賞

平和のもとで心をつなげていく

島根県雲南市立

三刀屋小学校 三年

狩^{かり}野^の敦^{あつし}

「平和って、どういうことかな。」

ぼくは、三刀屋小学校にてん校してきて、はじめて平和について考えました。

始め、平和にするというのは、おそろいせんそうやばくだんをなくして、かなしい思いをする人をなくすことかなと思いました。でも、それだけじゃないと、友だちと話して気づきました。家ぞくがいて、おいしいごはんが食べられること。友だちといっしょに遊べること。いっしょにわらえること。自分の考えが言えて、友だちに聞いてもらえること。困ったときに助けてもらえること。「ごめんなさい。」が言えて、ゆるしてもらえるこ

と。失敗してももう一度チャレンジできること。自分もみんなもうれしくて幸せな気持ちになることが生活の中にいっぱいあることがわかりました。これは、みんなの幸せにつながる平和のもとだなと思いました。

そして、ぼくは、この四月からのことを思い出しました。始まりようしきの日、愛知県から引っこしてきたぼくは、「どんな学校かな、友だちができるかな。」とふあんな気持ちでいっぱいでした。みんなの前で自分の名前を言うのもすごくきんちようしました。そのとき、前の学校の友だちが、

「元気でね。たくさん友だちを作ってね。」

と言ってくれたことを思い出して、ゆう気が出ました。はなれたところにいても心がつながっているんだなと感じました。

ゆう気を出して自こしようかいをしたら、三刀屋小学校の友だちはえ顔で聞いてくれて、たくさん話しかけてくれました。すごくうれしかったです。ふあんだった気持ちだが、一気にふきとびました。ぼくも、名前をおぼえて自分から話しかけてみました。すると、

「名前おぼえてくれたんだね。ありがとう。」

と休み時間にたくさんの方たちがさそってくれました。
がんばって話しかけてよかったなと思いました。

それから、自分からたくさん話しかけることにしました。発表するのがんばりました。行事で三年生の代表にもちようせんしました。これまで、自分からすることはそんなにとくいじゃなかったけれど、友だちとなかよくなれたりいっしょに何かしたりすることがうれしくて、どんどんがんばれました。そのことを単身ふにんしている父に話すと、

「すごいな。お父さんもがんばるよ。」

と言って、よろこんでくれました。今度は、ぼくがゆう気をあげられたかなと思いました。

平和について考えることを通して、生活の中には平和のもとがたくさんあって、友だちや家ぞく、たくさんの人と心がつながっているということ、そのことがゆう気になってもっとたくさんの人とかかわっていくことができることがわかりました。ぼくはこれから、自分にできる平和のもとをふやして行って、たくさんの人と心をつないでいきたいです。そして、みんながたくさんの人とかかわり、心をつないでいけるようにしたいです。



◆ 小学生低学年の部 ◆

優 秀 賞

人をたすけるって いいな

島根県雲南市立

三刀屋小学校 二年

石^{いし}飛^{とび}

湊^{みなと}

ぼくは、ながいたかしはかせのことを、二年生でおべんきょうしたよ。はかせは、やさしい人だったんだって。うんどうがにがてだったんだって。げんばくがおちて、けがをしても人をたすけたんだって。はかせはだいじょうぶだったんだろうかと、ぼくは今でもしんぱいになるよ。

ぼくは、この前、とべないすずめを見つけたよ。かれ草をあつめて、日かげのところにすをつくってあげたよ。なおやさんとゆうせいさんをつくったよ。すずめは、いごこちがよさそうに目をつむっていたよ。そのあと、ぼくたちの手にそつとのせて、さんぽをしてあげたよ。あ

たたかかったよ。すずめがうれしそうに見えたから、ぼくもうれしかったよ。

少しすると、すずめは、とんでいったよ。すずめは、草むらにかくれたよ。もうちよつと、あそびたかったけれど、すずめが、家ぞくのところに帰っていったから、よかったよ。人をたすけたはかせみたいに、ぼくも、すずめをたすけられてよかったよ。

この前から、ぼくのお母さんが、ぐあいがわるくて、しんどくて、ねこんでいるよ。あんまりたべられないみたいだ。ぼくは、お母さんに、のみものをはこんであげたよ。お母さんが、「ありがとう。」と言ってくれた。うれしかったよ。お母さんの元気がないとふあんだよ。お母さんが早くなおってほしいよ。

お母さんがねているから、お父さんがごはんをつくってくれているよ。ぼくは、お父さんのお手つだいをしているよ。しよつきをテーブルにおくお手つだい。でも、お父さんはありがとうと言ってくれないよ。なんでかな。お父さんは、いそがしいから、言ってくれないのかな。でも、ありがとうを言われなくても、ぼくの気もちは、うれしいよ。だって、ぼくも、だれかのやくにたつてい

るから。これからも、お母さんやお父さんのお手つだいをなるべくするよ。

よろこんでもらうとうれしくなるよ。これからも、人をたすけられたら、いいなあと思うよ。どうぶつも、人も、たすける人に、ぼくはなりたいな。



◆ 小学生低学年の部 ◆

佳 作

「如己愛人」の精神から学んだこと

島根県雲南市立

鍋山小学校 三年

伊^い東^{とう}奈^な津^つ

今年わたしは、担任の先生に永井隆博士の紙しばいを
読んでもらいました。

わたしは紙しばいを聞いて、博士はあと三年しか生き
ることができないのに、「自分の事より、人のことを思っ
てがんばってやるやさしい博士なんだな」と思いました。
博士の心には自分の事よりも人のことを大切にする「如
己愛人」の気持ちが強くあるんだなと思いました。だ
からこそ、永井隆博士はすごいんだなと思いました。
今のわたしには、将来のゆめがあります。それは「動
物のかんごしさん」になることです。

わたしが「動物のかんごしさん」になろうと思ったの

には、自分の飼っていた犬とのお別れがあったからです。
わたしは前から犬が好きで、ダックスフンドを飼って
いました。名前は「こじろう」です。

「こじろう」は年をとってから私の家へ来て、すぐにな
かよくなりましたが、しばらくして病気が見つかりなく
なっていました。

私はその時に悲しくて、悲しくて、ずっと泣いていま
した。なかよくなつたばかりの「こじろう」がいなくな
るなんて考えたことがなかったからです。その時に「こ
じろう」の言うことが分かっていたら、病院に連れて行っ
てあげることもできたんじゃないかな、もっと長生
きできたんじゃないかなと思います。

そんな気持ちになつていたから、そのころから、少し
ずつ「動物のかんごしさん」になろうと思うようになって
きました。

わたしは今も犬を飼っています。名前は「さくら」です。
毎日お散歩に行き、一緒に遊んでいます。いつまでもい
つまでも長生きしてほしいなと毎日思っています。だか
らすこしでも「さくら」の気持ちを分かってあげたいで
す。

まだ、「さくら」の言葉を分かることはできません。でも、鳴き声や散歩の時の歩き方を見ると「今日は元気だな」「ちよつと今日はげんきが悪いな」と感じる事ができるようになってきました。

少しずつかもかもしれませんが、「さくら」の気持ちが分かるようになる日が来るかもしれません。

私にとって、どんな動物もかわいくて、大切な友達です。私は、永井隆博士が、自分の事よりも困っている人を一人でも多く助けようとした気持ちを受けつぎ、私はたくさんさんの困っている動物を助けてあげられる「動物のかんごしさん」になりたいです。

そうしたら、少しでも永井隆博士の気持ちが分かるような気持ちになります。永井隆博士の「如己愛人」の精神を少しでも分きたいなと思います。わたしは「如己愛人」ではなく「如己愛動物」の気持ちを持った「動物のかんごしさん」めざしてがんばりたいです。



◆ 小学生低学年の部 ◆

佳 作

あたり前じゃないしあわせ

島根県雲南市立

掛合小学校 二年

中^{なか}村^{むら}楓^{ふう}花^か

「今日ね、地きゅうまわりっていうてつぼうのわざが、
できるようになったんだよ。」

と言うとお母さんが、

「すごいね！お母さん、そんなわざできないよ。」

と言ってくれました。すると、お父さんも

「すごいね！お父さんはできないからおしえてね。」

と言ってくれました。

わたしが一ばんしあわせなときは、家ぞくみんなでごはんをたべているときに、その日にあったできごとを家ぞくに話すことです。たいいくでめんかぶりクロールができたときは、家ぞくにすぐ話しました。まい日、うれ

しかったこと、楽しかったこと、くやしかったことを家ぞくに話したり、そうだしたりできるので、このじかんがとても大好きです。

もう一つしあわせだと思うことがあります。それは、友だちといっしょにあそんでいるときです。たまに、はらがたつてけんかになることもあるけど、あとになってから、じぶんがわるかったな、あやまろう、と思って、なかなかおりをします。みんなとあそんだり、べんきょうしたりするじかんが、わたしは、とても大好きです。

わたしは、ながいたかしはかせの話聞いて、じぶんのしあわせがなくなったら、と考えました。ながいたかしはかせは、せんそうで今までしあわせだった生活がなくなりました。でも、のこり三年のいのちをかんじやさんやほかの人のためにつかったながいたかしはかせは、かつこいと思います。

わたしは、まい日家ぞくといっしょにごはんをたべながら話すじかんや、友だちとなかよくあそんだり、べんきょうしたりする生活はあたり前じゃないなと思いました。だから今のじぶんの大好きな家ぞくや友だちをもっともっと大せつにしていきたいと思いました。



◆ 小学生高学年の部 ◆

最優秀賞

ぼくと祖父と博士

島根県雲南市立

木次小学校 五年

村^{むら}尾^お拓^{たく}真^ま

「多くの人に支えられてきたこの命。感謝して一日一日を大切に生きていきたい。」

これは、ぼくの生まれる一年前になくなった祖父が、病床でノートに書き残していた言葉です。

ぼくがこの言葉を知ったのは、今年の六月です。それまでは、祖父のことを仏だんにある笑顔の写真でしか知りませんでした。しかし、今年の六月にあった祖父の十三回きの法事で、祖父がどんな人生を送ってきたかを知ることになりました。

はつらつとした人生を送っていた祖父は、四十八歳にして突然白血病におそわれました。祖父が治るためには、

こつずい移植が必要でした。ぼくの母の型がきせき的に適合し、移植したものの、回復は一時的なもので、すぐに再発してしまいました。こつずいバンクのドナーからの二度目の移植を受けて、今度こそ回復したかのように思われましたが、三回目の発症にいたりました。それまで以上に辛い治りようの中、弱音をはかず副作用にたえた祖父。母から受けた三度目の移植が、最後の治りようとなりました。強い薬を体に入れ続けたことが、体への大きなダメージを生み、発病から四年後、亡くなってしまいました。

祖父のノートには、周りの人たちへの感謝の気持ちがたくさんつづられていました。顔も知らないドナーの方、長いという病生活を支えた家族や友人、そして、「あきらめないで」と最後まではげましてくれた病院の先生方。学校の先生をしていた祖父は、病気が治ったら校長先生になって命の授業をするという夢があったそうです。体も辛く、とう病生活も辛かったはずですが、感謝して前向きに生きていこうとする祖父の姿が目にかんできました。そして、ベッドでノートを書いていく祖父の姿が、永井隆記念館で見た博士の姿と重なって見えてきま

した。病名も、祖父と同じ白血病です。博士はねたきりになっても、書くことを通して、平和への思いや命の大切さを伝え続けました。博士と祖父の共通点を知ったとき、博士がとても近い存在になったように感じました。

博士は、自分が辛くてもかん者の治りようを続けました。戦争で薬も設備も十分ではない中で、希望を捨てず、できるかぎりのことをしました。博士の治りように救われた人々は少なくないでしょう。祖父も、ドナーの方や周りの人たちにはげまされながら、最後まで希望をもち続けたのだと思います。どんな時代でも、人は人の心によって救われると思うのです。

ぼくは、友達のことではなやんで、自分に自信がなくなることがありました。しかし、祖父や博士の希望にあふれた生き方にふれたおかげで、自分に自信がもてるようになりました。ぼくの生まれる一年前に祖父が感じていた、希望の気持ちをひきつがなければと思います。祖父が生きたたかったこの一日一日を大切に、感謝しながら生きていきたいです。



◆ 小学生高学年の部 ◆

優 秀 賞

人を愛する気持ち

島根県雲南市立

西日登小学校 六年

田^た中^{なか}鼓^こ春^{はる}

永井隆博士は、自分が苦しい時でも、自分の体を犠牲にしてまで、多くの患者の命を救った。私はそんな博士のすがたが消防士である父のすがたと重なった。

今年の七月、西日本豪雨のため各地で大きな被害があった。私はその様子を父とニュースで見ていた。ふだんの街並みがいっしゅんにして大量の土砂やはらんした川水に飲み込まれ、以前の面影がなくなっていた。その時、私の兄は広島に住んでいた。兄から話を聞くと、アパートの水が断水したり、店に並ぶ食料が不足したり、各地で生活に困っている人がいたという。

そのような中、父は消防士として被災地へ救援活動に

向かったのだ。私は、怖く不安な気持ちをぐっところえて「父なら大丈夫」と無事を祈って見送った。

父は三日間、倒れた木々や土砂、くずれた家が山積みになっている場所でそうさく活動をしたそうだった。また、にごった川の中にも入ってそうさくを行ったそうだった。自分の身も危険にさらされるような場所でのそうさく活動。父はなぜ自分の命を危険にさらしてまで他の人の命を救うことに必死になれたのだろうか。怖くはなかったのだろうか。このような思いに対して、父は私に

「現地の人がすごいがんばつとらいたけん、がんばれた。」と話してくれた。確かにニュースでも、中学生が土砂を運ぶ作業を手伝っているところを見た。ひなん場所でも食料や飲み物をたくさんの人に配っている人がいた。私はきつと「人を愛する気持ち」が父や現地の人の力になっているのだと思った。生存者や行方不明の方のために、懸命にそうさくを続ける人々、この人たちは、心から人を愛しているのだろうか。だから、自分のこと以上に、他の人を大切にすることができるのだと思う。私は「己の如く人を愛せよ」という博士の言葉を思い出した。

博士は「如己愛人」の精神で、患者を救い、そして患

者の家族をも救った人だと思う。私は初めて博士の事を学習した時、自分の事のように他の人の事を考えることができる博士は本当にすごい人だと思った。しかし、父や被災地で助け合う人々のように、だれにも身の周りには博士のような思いやりにあふれた人がいるということに気付いた。

私の将来の夢は薬剤師である。けがや病気で困っている人に優しく接し、助けになるような仕事をしたい。しかし、私にはまだたくさんの人を助けられるほど「人を愛する気持ち」を持っていないと思う。学校でも困っている友達に何もしてあげられないことがあった。これからは、そのような時も友達の気持ちを考えて行動できるようにしたい。そして、いつまでも家族や友達、地域の人が好きという気持ちを大事にしていきたい。人を愛することの大切さに気付かせてくれた父のすがたのように。



◆ 小学生高学年の部 ◆

住 作

笑顔のプレゼント

島根県雲南市立

吉田小学校 五年

大 おお
家 え

凜 りん

私の弟は二年生です。でも、話すことや字を書くことができません。それにご飯は決まった物しか食べられません。いつも弟の行動を見ておかないと、突然飛び出してしうので大変です。

でも、弟は好きなことがたくさんあります。テレビやアンパンマンのパズルは大好きです。花火やおんぶ、バランスポールも好きです。お母さんと弟と二人でお出かけに行った後は、笑顔で楽しかったよと伝えてくれます。水遊びも大好きです。よく土日、家族で近くの吉田川に川遊びに行きます。弟が笑顔になると私も笑顔になります。

弟が小学校に入学する前、私はとても心配でした。みんなとなかよくできるかな。知らない人にいじめられないかな。給食をちゃんと食べて元気で過ごせるかな。たくさん心配しました。私だけじゃなく、お母さんも心配していました。お母さんと私は、弟のことを紹介するために絵本をつくりました。吉田小学校のみんなに、弟の好きなことやきらいなことを知ってもらうためです。私は絵を描くことや色ぬりを手伝いました。完成すると、お母さんが吉田小学校のみんなに読み語りをしました。私は一緒に聞いていて、みんなに伝わっているかな、弟の様子が変わったかなと少し不安になりました。でも、みんなの顔を見ると、この本で少しは弟のことがわかってもらえたかなと思いました。

入学式の日、弟は大好きな回転椅子にすわっていました。弟の目標は、自分の名前を呼ばれるところまででした。私は心の中で「がんばれ!」と応援していました。すると、ちゃんとみんなと一緒にすわって、飛び出さず自分の目標までたどりつくことができました。緊張していたと思うけど、目標の時間をこえるくらいがんばってすごいなあと思いました。

今はほしぐみで、毎日ががんばって勉強しています。小さい物を道具ではさんでちがう入れ物に入れたり、糸にビーズを通したりする勉強をしています。休み時間は、先生や友だちと楽しそうに遊んでいます。自分のペースでできることをがんばっているところはみんなと同じです。みんなにタッチであいさつすることもできるようになりました。みんなが優しく接してくれるので、弟のほうからみんなのところに行けるようになりました。弟も笑顔だし、周りのみんなも笑顔になります。前は心配していたけれど、今ではみんなと仲良くしているので安心していきます。

弟が笑顔でいられるのは、みんなが仲良しで、いじめなどがないからだと思います。みんなが笑顔でいられるためには、仲良く助け合うことが一番だと思います。元気がない人や困っている人がいたら、みんなが笑顔のプレゼントではげますといいと思います。そうすれば、笑顔が広がり、その子も笑顔でいられると思います。私もみんなに笑顔のプレゼントがおくれる人になりたいです。



◆ 小学生高学年の部 ◆

佳 作

平和の基になる言葉

島根県雲南市立

阿用小学校 六年

勝 かつ
部 べ
瑛 えい
資 すけ

ぼくは、「如己愛人」という永井隆博士の言葉を、あまりいい言葉だとは思っていませんでした。その理由は、「如己愛人」ということが、ぼくには理解できなかったからです。己の如く人を愛しても、人が楽しくなったりうれしくなったりするということはないと思っていました。

ぼくは、社会体育でバドミントンをしています。バドミントンでは、個人戦と団体戦の二つがあります。ぼくは、団体戦のときにはほとんどダブルスでやります。前半までは、パートナーがミスをして、「大丈夫だよ。」などと声をかけています。けれど、後半になってから

パートナーがミスをする、と、だんだんいらいらしてきてちよつと怒ってしまうときがあります。こんなときのぼくは「如己愛人」などできません。他人がミスをしているのに、なぜその人を愛さなければいけないか分からないからです。けれど、六年生になって、永井隆博士の「如己堂隨筆」の中の一文を読んで、ぼくは、これを試してみようと思いました。そこには、「人がそれぞれ完全円満な者でないなら、互いにあやまちをしでかしたり、考えのちがうことはありがちです。それをお互いに許すことが平和の基です。」と書いてありました。

その後の試合で、パートナーがミスをしたとき、前は怒っていたけれど、（今日は怒らないように心がけよう。）と思ってがんばってみました。けれど、パートナーが何回もミスをし、ついにぼくは怒ってしまいました。その後、ぼくもミスをしたので、パートナーも怒ってしまつてけんかになりました。ぼくが怒っていなければ、そしてパートナーを許していれば、けんかにはならなかったと思います。ぼくたちはだれも完全円満ではないから、失敗したり、あやまちをしでかしたりするのはあたりまえです。それを許し合わなければ平和はあり得ないとい

うことです。でも、結局、ぼくには難しくてまだできませんでした。

永井博士の「如己愛人」とぼくの「如己愛人」は広さも深さもちがうと思います。ぼくは博士とちがって戦争も原爆も知りません。原爆でひどいけがを負った博士の「如己愛人」は、ぼくが想像できないくらい大きいものだと思います。ぼくの心は、ダブルスのパートナーも許すことができないほど小さいです。でも、ぼく一人でも人をゆるすことで平和の基となるのだったら、ぼくはこれから「如己愛人」という言葉を大切にしていきたいと思っています。だれかがこの言葉を大切にすると、周りの人もこの言葉を心に留めて、「如己愛人」が広がっていくのではないかと思います。そしてそれが世界に広がると、いつかどの国からも戦争がなくなって平和な世の中になると思います。人をゆるすことは難しいことではあるけれど、心に留めておけば、いつかはきっとできるようになると思います。



最 優 秀 賞

壁の外側で

広島県

ノートルダム清心中学校 三年

谷 たに 成 なる 葉 は

『好き』の反対は、『無関心』や。」

炎上商法が横行中の、液晶画面の向こう側の世界で、こんな事を言っていたのは誰だっただろうか。私は晩ごはんを食べながら、この人の意見に妙に納得していた。ある人に抱く感情が「嫌い」ならば、私達は何だかんだいってその人を心のどこかで気にしている。好きに変わる可能性だってある。

しかし、「無関心」となるとー。知らない、興味も無い、言ってしまうはどうでもいい…。相手のことを気にも留めないのだからその人が死のうが苦しもうが、自分の心はぴくりとも動かない。本当に、救いようがない三文字

である。

好きの反対は、無関心。それならば、愛の反対はどんな言葉なんだろうか。平和と愛について、のテーマを見た時に、ふと考えた。

「憎しみ」とか、「冷淡」とか…。頭の中をぐるぐると単語が飛ぶ。取捨選択していった、最後に残った言葉はやはり「無関心」だ。

この言葉を見ると、雑貨店の銀色のタンブラーを思い出す。注いだ飲み物はずっと冷たいまま、と売り出してあった。「無関心」の内側はきつと、どこまでも自分勝手な冷たい。

そんな想いを、私は多分世界中の何十億もの人々に抱いている。自分と、自分の大切な人を何十人か入れた世界の壁の向こう側に。

この世界が平和だと言い切れないのは、この壁に囲まれた小さな輪が乱立しているせいだろう。日々私達の生活に飛びこんでくる世界情勢や災害、テロのニュースはあくまでも壁の外の話。淡々としたアナウンサーの声はバックミュージックのように壁の外側を流れいつのまにか消えていた。

ところが、思い返せば私は一度だけ、報道の声をとらえて壁の外へ一步飛び出したことがあった。平成における最悪の水害、西日本豪雨災害の時だ。

行ったことがある駅、聞き慣れた街の名前。それらが次々と茶色い水に浸食されていく様を見て、テレビの前で一人愕然とした。

「無関心」ではいられない。そう思った私は、大急ぎで保険に入り、準備を進め、気がつくと友人と被災地の一つ、口田南に行っていた。いつのまにか壁の外へ出ていたのだ。

そこで待ちうけていたのは、原型を留めていない家、吐き気のするような泥の臭い――。

でも、それ以上に心に残ったのは、多分、一生知り合うことが無かったであろう、壁の外側にいる人との交流だった。

ありがとうね、と言いながら、私の汚れた長靴を流してくれた人、おにぎりを三つも四つも全力で渡そうとしてくるおじいちゃん、お互いを気遣い合いながら一緒に泥をかいた同じグループの大人達……。

嫌な人もいた。つらい思いもした。好きな人達と一緒に

に、快適な壁の中で暮らす方が楽なのは確かだ。それでも、へろへろになって家に着き、シャワーを思いっ切り浴びながら私は、いつかまた行こうと決心を固めていた。

なぜなら、「無関心」という名の壁の向こう側には、私が今まで知ることのなかった新しい世界が広がっていたからだ。そこには、暗い出来事の数と同じくらい、人々の明るさや優しさがあることを、このボランティアで痛切に知った。圧倒的な人手不足も、二次災害の脅威も、知ってしまったらもう、見てみぬふりはできない。「知る」こと、それは、自分と周りを動かす大きな原動力となった。

今、私はきつと、「無関心」の壁を無数に造っている。地球上のあちこちで災害や紛争が起きる時代、この壁をゼロにすることは、不可能に近いかもしれない。でも、報道の声に耳をかたむけ、自らも行動することで、一步確実に、壁はゼロへと近づいていく。

壁の外で、驚き、傷つき、もがき、時に内側の世界に逃げこみ、また外へ一步踏み出して……。世界中の人がそうやって、やがて壁の無いまっさらな世界に広がっているもの。それが本当の「平和」ではないだろうか。

◆ 中 学 生 の 部 ◆

優 秀 賞

平和を思う

山口県下松市立

久保中学校 二年

久^{ひさ}武^{たけ}梨^り緒^お

「平和とは何でしょうか。」平和学習をすると必ず投げかけられる問いだと思います。私が、平和と聞くと、並行して頭に浮かんでくるキーワードがあります。それが、戦争と原爆です。そして、やはり、あの年の八月のことに行き当たるのです。

私が通う中学校では、毎年二年生が平和学習に臨みます。私たちも今年の五月に広島を訪れました。平和記念資料館では、写真や絵などを通じて、原爆がもたらす恐ろしさを外見で感じるのですが、それ以上に強く感じたのは、人々の人生をたった一瞬で狂わせるという原爆の内側の恐ろしさでした。

原爆は罪の無い多くの一般市民の命を一瞬にして奪いました。どうして、誰も幸せにならない武器を人間は造ってしまったのでしょうか。人の命を奪うという行為は、決して許されないと分かっているながら、人を殺しても罪にならない戦争という道を、なぜ、人は選ぶのでしょうか。私は痛々しい写真を前に、途方に暮れ、悲しい気持ちに包まれました。そして、やはり、「あの時代に生まれてなくてよかった。」と思いました。こんな気持ちを本当はもつべきではないと分かっているつもりです。それでも、戦争の残酷さを目の当たりにすると、そう思えて仕方ありません。

資料館を見学した後、私たちの班は、広島を研修して歩きました。知らない町で地図を片手に友達と一緒に歩く機会はなかなかないので、とても楽しめました。でも、ふと立ち止まり、あの時、この辺り一帯が焼け野原だったのかと、資料館で見た光景を重ね合わせ、はつとさせられました。私たちが歩いていたのは、爆心地から数百メートル、この位置よりも、もっと遠くまで被害が及んでいたと思うと、初夏の強い日射しを浴びているはずなのに、背中がぞくつとしました。こんな酷く残酷

なことがあつてはならないと、怒りがこみ上げてきました。

私は、平和学習を進めながら、核兵器は絶対に人々に平和をもたらさないと確信しました。それなのに、どうして核兵器を必要としている国が今もあるのでしょうか。核兵器があるから戦争が起こらないと主張する人もいます。でも、私は核兵器が無くならない限り、本当の平和はいつまでも訪れないと思います。そして、唯一の被爆国である日本が、核廃絶を呼びかけていくべきだと思います。しかしながら、今の日本は核の傘の下で、ただ、おとなしく突っ立っているだけのよう感じてなりません。このまま、核の傘に守られて良いのでしょうか。今、この時も被爆者の方々は、核廃絶に向けて、過去の悲惨な出来事を未来に伝えようと懸命です。だから、次は、戦争を体験していない私たちが、平和のために行動を起こす番です。

戦争を知らない私は、「平和」の本当の意味をはっきりととらえることはできないかもしれません。でも、その「平和」をみんなが考えていけば、それこそが、平和につながるのではないかと思います。

平和学習の中で、痛ましい現実を目の当たりする度に想ったのは、家族や友達、私にとつての日常でした。「あの時代に生まれなくてよかった。」と思うのも、自分のいつもの日常が無くなると思うと本当に怖いからです。平和学習を進めることで、私にとって日常がどんなに幸せで、愛に溢れているか学ぶことができました。家族や友達との時間を大切に過ごそうと思えるようになりました。

私は、平和に対する答えをまだ見つけられていません。ただひとつ言えるのは、「平和」とは、誰もが安心できる言葉だということです。平和はつくるものなのか、与えられるものなのか、平和に対して真正面から考えることが、あの時、間違った選択をした人類が果たさなければならぬ最大の義務だと思います。



佳 作

繋ぐ平和

沖縄県八重瀬町立

東風平中学校 三年

伊^い 禮^{れい}
彩^{あや}
花^か

二年前の夏、総合的な学習の一環で、私たちは初めて「ヌヌマチガマ」という壕に行くことになった。

どんな場所なのだろう、まるでオカルト映画にでも行くかのようなワクワク感を感じながら出発した。意外にも、学校からその場所は近く、十五分程でその壕に到着した。

初めて入る壕の中は、想像を絶するほど暗くジメジメしていた。何か得体の知れないモノがいそう、鳥肌がたち寒気がした。「面白そう」と思った少し前の自分を後悔した。外は晴れて明るかったのに、中は雨が降ったあとのように湿気が凄い。足場も悪く、真っ暗闇で、少

しの灯さえ見えない。一歩足を進める事さえ恐怖で足が竦んだ。戦争中、こんな所に身を潜め恐怖と闘っていた人がいたなんて考えるだけでもゾツとした。

沖縄は、唯一地上戦のあった所だ。そのため私達は、小学生の頃から平和学習を当たり前のようを受けている。でもいつもどこか遠くであった出来事のように聞いていたし、実感はわかなかった。しかし、実際その場に足を踏み入れると、言葉では表現しようもない何かが胸の中にこみ上げた。

この沖縄では二十万余もの人々が戦火を逃げ惑い、目に見えない敵と闘い続けた。家も家族も奪われ、今日を生きる事さえ許されず、絶望の淵にたたされた。尊い命が無残にも奪われたのだ。

昼も夜も銃声が轟き、味方であるはずの日本兵さえも信じる事ができない地獄の日々の中、先人たちは何を希望に生き続けたのだろうか。

確かに七十四年前に戦争は終わったはずなのに、その傷跡は未だ消えず残っている。毎年、戦没者の遺骨は発見され続け、土を掘れば未だ不発弾が見つかり続けている。この沖縄で「戦争」は過去ではなく、終わりの見え

ない問題なのだ。

時は過ぎ、世代は代わり、この沖縄も様変わりし発展し続けている。あの時代を生き延びた人々は高齢になり、戦争の苦しみや悲しみを語り継ぐ人は減少してしまった。

でも決して忘れてはいけないのだ。戦争の爪痕や先人たちの思いを風化させてはならないのだ。

「戦争のないこと」。それが「平和」なのだろうか。この日本は、私の住むこの沖縄は、平和だと言えるのだろうか。我が子を虐待する事件や、不満を理由に平気で人を傷つけ殺害する忌まわしい事件が珍しくない昨今。自己中心的なことばかりが日常化している現代を本当の「平和」な世の中と呼べるのだろうか。

「平和」とは何だろう。

「相手を思うこと」「思いやること」それを失う事こそが平和を崩す根源ではないだろうか。人は決して一人では生きていない。生きている限り誰かと交わり、助け合いながら生きている。だからこそ、「こんなことをしたら相手が嫌がるかな、喜んでくれるかな」と、「常に相手を思いやる気持ち」が大事なのだ。平和だといわれる

中で平気で生きる私たちだからこそ絶対に忘れてはいけないことなのだ。

人は人の優しさや思いやりの中でしか変わることができないと私は思う。愛なくして人は幸せにはなれない。

『己の如く人を愛せよ』という精神こそ、先人たちが「命」のバトンをつないだ私たちが忘れてはならない大切なことなのだ。



◆ 中 学 生 の 部 ◆

佳 作

平和とは

島根県雲南市立

三刀屋中学校 二年

岩 いわ
崎 さき
大 だい
地 ち

「平和って具体的にはどんなことですか」と聞かれたら、どう答えますか。なかには、「戦争をしないこと」「争わないこと」と答える人もいます。実際に多くの友達に聞いてみると、「うーん。」と答えに悩んでいました。ぼくもですが、たいていの人は、平和について具体的に答えてと言われたら、答えに困るのではないのでしょうか。

日本という、平和で環境のよい国に住んでいるぼく達。こんないい国も、昔は戦争というあやまったことをしてしまいました。しかし、だからこそ、今の環境があるのだと思います。

一昨年の夏、ぼくは家族といっしょに広島県の実原ドームに行きました。小学校の修学旅行で訪れてはいたのですが、十分見学できませんでした。だから、その日はしっかり見て回りました。

その日は日曜日ということもあって、たくさんの方が見学に来られていました。弟といっしょに歩いていると、車イスに乗ったおじさんが、

「そのきみ達、何年生？」

と聞いてくれました。当時ぼくは六年生で弟は五年生だったので、そう答えました。他にもいろんなことを聞かれたので答え続けていると、このおじさんは、直接は被害にあわれているわけではないけれど、家族が原爆ドームのすぐ近くに住んでおられて、原爆の被害にあって亡くなられていたことが分かりました。ぼくは初めて、被害にあわれた人の話を聞きました。悲しさや、残さなどがすぐく伝わってきました。

「戦争はね、やってはいけないことは知ってるよね。けど昔の人は戦争をしてたんだ。今思えば、戦争はいけないと分かるけど、当時の考えは、戦争とは国を守る大切な行動と思われていたんだよ。」

ぼくはこの話を聞いた時、ショックを受けました。戦争を正しいと思ってやっていたと、初めて知ったからです。

「ぼくはね、戦争をやったところで何の意味もないと思うんだ。何も得ることはできないんだよ。人と人が傷つき合う、そして、大切なものを失う…。」

本当におじいさんの言うとおりだと思いました。戦争は人と人が傷つき合うだけ。当時の人は戦争をやって何を得ようとしていたんだろう。ぼくは疑問に思いました。

「きみ達にお願いがあるんだ。このおじいさんが話した話、経験を、友達や家族、だれでもいいからいろんな人に話して伝えていってほしい。二度と戦争が起きないように。そして、二度とこのおじいさんのようにつらい思いをする人が現れないように。きみ達よろしくたのむよ。話を聞いてくれてありがとう。」

この話が終わった時、おじいさんの話をたくさんの方が集まって聞いているのに気づきました。

月日が進むのにつれて、戦争を経験された人は少なくなってきました。伝える人が少なくなっていくと、戦争

の情けなさや怖さ、残こきなどを知らない人が増えてきます。それでは、また戦争を起こしてしまうかもしれません。だけど、そんなことはしたくない。そのためには、ぼく達一人一人が次の世代に伝えていく必要があると思います。ぼくは、おじいさんをお願いされたことを果たしていきたいと思います。

ぼくはこの作文の最初に「平和って具体的にはどんなことですか」と問いかけました。もし、だれかがぼくはこの質問をしてきたら、自信を持ってこう言います。

「相手のことを大切にできて、自分のことも大切にできた時のこと。」と。



佳作

如己愛人ゝ生きてこそゝ

広島県

盈進中学校 三年

酒見知花
さか み とも か

「私は、『あの日』の辛い過去を忘れたいと思ってきたの。でも、いま、黙っていたら、再び戦争が起きる気がするの。だから、死んだ仲間のためにも語ることにしたのよ。」

広島の被爆者、八十八歳の切明千枝子さん。彼女は、八十歳から証言を始めた。

私は、彼女のことばのすべてを後世に残そうと、彼女の真横で必死に記録した。いま、仲間といっしょに、その証言集を作成中だ。

「あの日、病院に行くため、学徒動員を休んでいたの。そして、八時十五分。閃光は免れたものの、建物の下敷

きになり、ガラス破片が頭に刺さった。私は、友達に言われるまで、自分のけがに気づかなかったの。

しばらくしたら、建物疎開に出ていた下級生がぞくぞくと帰ってきた。その姿は皮膚をずるずると引きずり、誰かわからないほどだった。急いで炸裂したガラスで埋め尽くされた理科室を片付け、下級生の手当てをしたの。すると、ある下級生が私に『水をください』と懇願したの。でもね、衛生兵に、『水を飲んだら死ぬぞ！』と言われたから、飲ませてあげることができず、下級生は亡くなってしまった。その光景がいまも脳裏に焼きついて離れないの。同じ死ぬのなら、水を飲ませてあげればよかった。後悔している。

校庭に穴を掘り、私はこの手で、下級生の死体を焼いたのよ。内臓が破裂した。自転車のパンクの音のようだった。死体は、焼かれながら収縮して、手足が動いていた。私は、ガタガタ震えていた。でも、目を背けることはできなかった。あの時の彼女の表情、声、息絶える姿、焼かれる光景……今でも全部、思い出して、心が痛むの。学校では、先生にこう言われたの。『お国のために命を捧げる』って。『天皇陛下のために、喜んで死ぬ』って。

間違った教育は怖いよ。」

私は、いまでも七十三年前の「あの日」を思い出し、苦しんでいる人がいることを知った。同時に、水を飲めずに亡くなった少女が自分と重なり、想像するだけで胸がえぐられる思いだった。そして、核兵器廃絶のために、私たち若者が被爆者の思いを、確実に後世に伝えなければならぬという使命感に駆られた。証言集の作成は、その思いの形である。

私は中学一年の時から、仲間や先輩と共に、核兵器廃絶の署名を集める活動をしている。灼熱の夏も、雪が舞う冬も、街頭で、市民の平和の願いを一筆一筆、心を込めて集める。「核は無くならない。」「家で勉強しろ!」活動を批判する意見を浴びせられることもある。でも、中学一年生の時に出会った被爆者からもらったことばを思い出せば、なんともない。

「若者が動いてくれるのはうれしいよ。絶対に核は無くせる。ありがとう。」

先日、長崎を訪れたことがある先輩から、永井隆先生の「如己愛人」の色紙を紹介していただいた。「己のごとく人を愛せよ。」意味を知り、「あの日」を証言する切

明さんの声と姿が蘇ってきた。そして、切明さんが証言の最後に私たちへ託してくださった次のメッセージは、永井隆先生と同じ「如己愛人」だと、私は感じた。

「生きてこそ平和。あなたたち若者を戦争で死なせないの。だから、諦めないで行動してほしい。私も命ある限り、語るから。」

被爆者の平均年齢が八十歳を超え、悲しいことだが近い将来、「生の証言」が聞けなくなることは確実だ。だからこそ、いまを生きる私たちが、被爆者の「もう誰にも自分と同じ思いをさせてはならない」という復讐や敵対を超えた素朴で崇高な平和への思いを記録し、記憶し、継承していくと、決意する。

「核廃絶は被爆者の苦しみが原点。」「自身も被爆者の故・森瀧市郎先生の哲学で、私がいつも胸にしまっていることばだ。」

「如己愛人。」永井隆先生のように、自他の区別なく、命を愛おしみ、被爆者の方々の思いを胸に刻んで、私は今年も街頭に立つ。

◆ 高 校 生 の 部 ◆

最 優 秀 賞

八月九日に生まれて

神奈川県

桐蔭学園高等学校女子部 三年

ふた つぎ りさこ
二 木 理沙子

私は八月九日に生まれました。七十三年前長崎に原爆が投下された日です。そんな縁もあり、お誕生日には原爆や戦争について考える機会が多くありました。

幼い頃は、日射しの眩しい明るく楽しい夏休みに、テレビや新聞が戦争の重苦しい話をたくさん取り上げるのが不釣り合いに思えて嫌でした。ですが、十歳頃から何度か長崎に家族旅行をし、原爆資料館や平和公園を訪れ、資料館のカフェにまでお馴染みとなっていくにつれ、気持ちは変わって行きました。

八月九日を資料館で過ごした年もありました。また、昨年の私の高校の修学旅行先は偶然にも長崎で、先生や

友人たちと訪れるのはそれまでにない新鮮な印象をもたらしてくれました。一月半ばでしたが、昨年の長崎は三十年ぶりの大雪だったそうです。

こうしていつしか長崎の被爆は、自分とは切り離せないものになっていました。

二〇一五年に家族でアメリカ旅行をしました。ニューヨークでは国連本部を見学する機会があり、安全保障理事会会議場など様々な部屋を廻りました。三階のホールでは、聖アグネス像が展示されていました。左手に迷える子羊を抱えた石の立像です。一九四五年に長崎の教会で被爆し、左肘から先がありません。原爆の悲惨さを訴えるためここに來たのです。その時私は、世界中のどのくらいの人々が日本への原爆投下を知り、一般市民に対する核兵器使用について考えてくれるのだろうかと考えました。

翌二〇一六年、オバマ米大統領（当時）が来日し、現職大統領として初めて被爆地広島を訪問しました。五月二十七日、広島市の平和記念公園で世界に向けて演説をするのをテレビで観ていて、こんな凄いことがついに実現したのかと静かに深く感動しました。

にもかかわらず、日本は翌年国連本部で採択された「核兵器禁止条約」の交渉にすら参加しませんでした。

学校の調べ学習で、戦災孤児について考えたことがあります。上野に集まってきた浮浪児についてが中心で、それは非常に悲惨な状況で、当時の東京の孤児院は劣悪な環境でした。永井隆の『この子を残して』に描かれる孤児院ならば、精神面の充実に欠けても衣食が足りるだけでしたと感じました。地域性や戦後何年目かによっても違うでしょう。

この本は永井博士の子どもたちに対する深い愛情に貫かれています。最初に読んだ時、長く生きられない博士の子どもへの想いに胸が痛くなりました。

最近読み返して、博士は原爆を憎むだけでなく、前向きにも捉えていると気付きました。「人類の居眠りをさます大気合いだった」としています。

それは吉田満『戦艦大和の最期』に登場する哨戒長臼井大尉の言葉と重なります。

「進歩のない者は決して勝たない、負けて目ざめることが最上の道だ、…俺たちはその先導になるのだ、日本の新生にさきがけて散る、まさに本望じゃないか」

この本も私の座右の書のひとつです。戦争や原爆を憎む人たちは、その時代にあつてそこを生きて行かねばならないのなら、そこに意味を見出すことを願うのです。その苦しさや切なさには現代の私にも訴えかけてきます。

私は現在高三で大学進学を希望しています。戦争や紛争で苦しむ人のいない世界にする勉学を志しています。それには、多岐にわたる分野からのアプローチがあるはずです。

最初は直接的に国際関係を学ぶことに惹かれ、次に永井博士のような放射線医学の研究に興味を持ちました。今は工学的見地から社会環境を発展させる勉強をしたいと思っています。永井博士は「食欲より職欲」とも仰っています。全く同感です。

どの分野に進んでも、日本の、世界の恒久的平和に貢献できる仕事に至る途はあると信じて、この夏も勉強していきます。



◆ 高 校 生 の 部 ◆

優 秀 賞

私たちは平和を手に入れられるのか

東京都

東洋英和女学院高等部 二年

横山 公香
よこ やま きみ か

今年の春、私は修学旅行の一環として長崎を訪れる機会を得た。新緑の季節の坂の町は、学生や観光客で賑わっていた。だが、活気に満ちた情景の中で、私の脳裏にこびりついて離れなかったのは、七十三年前の惨劇の爪跡であった。一本柱になった山王神社の鳥居、永遠に時がとまった時計、そして、永井隆博士が幾多となく残した「平和を」の文字――。人はなぜ今も争い、殺し続けているのか。過ちを悔いる思いと、平和への願いは憎しみの前には無力なのだろうか。改めて人間と平和について考えたいと思った私は、曾祖父の手記を手にとった。

一九四一年、曾祖父が上海へ移住した年から手記は始

まる。戦争の影が忍び寄る中ではあったが、商売もまずまず、順調な生活を送っていた。中国人とも共に働いており、中でも老和上と呼ばれていた老爺に対しては、「実に愛すべき好老爺であった。」と、親愛の情を見せている。国籍は違えど、労苦を共にした者たちの間には確かな絆があったようだ。しかし、穏やかな日々は長くは続かなかった。「重苦しいムードが居留邦人間に浸透して行った。」とは、サイパンが陥落した時のことを回顧しての言葉である。彼らの困難は終戦後も続いた。「敗戦国民にはなんら生命財産の保障はなかった。我々は日本歴史始まって以来の亡国の民になった訳である。」この二文からは量り知れない程の寂寥感が感じとれるだろう。翌年、彼らは命からがら日本へ引き揚げた。事業や資産など、築き上げてきたあらゆる物は、上海に残さざるをえなかった。

手記はとても詳細で、等身大の人間が見た戦争の実態を教えてくれた。また、手記に関して祖父に資問をした中で、二つの興味深い事実が明らかになった。

一つ目は、曾祖父は生前、一切戦時中の話をしなかったということだ。手記を残す、という行為と矛盾してい

るように思えるかもしれないが、きっと彼にとって戦争の記憶は軽々しく口に出すべきものではなかったのだろう。可能な限り正確かつ克明に戦争の過ちを後の世代に伝えるため、紙に記録する、という手段を選んだのではないかと推測する。

二つ目は、曾祖父が共に働いていた中国人に祖父が日本で再会したということだ。シーセイという名の彼は、少しでも日本に引き揚げた一家のためになれば、と上海に残されていた資産の一部を持つてきて下さったそう。この直後に日中間の交流がほぼ途絶えていることを鑑みると、一家のためにシーセイ氏が冒したリスクがかなりのものだったことがわかる。

私は曾祖父の手記と祖父の話を通して、人間が持つ二つの力に気がついた。

一つ目は、自らの経験や教訓を後世に残す力、また、先人の遺志から学び、それを未来に活かす力だ。終戦から半世紀以上経った時代に生まれた私達が、戦争について学ぶことができるのは、先人達の多大なる努力のおかげに他ならない。残された言葉や絵や建物を見てみると、自分達が体験した悲しみ、苦しみをもう誰にも味あわせ

ないという強い決意すなわち未来への愛にみちた叫びが伝わってくる。その叫びを受け継ぎ、未来に活かす力を私達は持っているのだ。

私達をもつ二つ目の力は、隣人愛だ。先述したシーセイ氏のエピソードは、国同士が敵対しても変わることはない絆の永続性を明らかにしている。このような深い親愛関係に留まらず、隣の人をふとした時に思いやることができるだけで、人々は互いに救い、救われる関係性を築いていけるに違いない。

これら二つの力があれば、人間はきっと平和を達成することができる。だが、この力の有用性は、私達の使い方によって大きく左右されるだろう。憎しみに打ち勝ち、平和を獲得できるかどうかは、私達ひとりひとりの双肩にかかっているのだ。



◆ 高 校 生 の 部 ◆

佳 作

モノのカタチ

島根県

島根県立松江南高等学校 一年

浅野栞菜
あさの かん な

たとえば衝撃を与えると割れてしまうガラスのように、他の色を加えると色を変えてしまう絵の具のように、モノはいとも簡単に姿を変えられてしまう。カタチあるものとして存在し、また別の何かに変わる瞬間を自分の目で捉えることができるこれらとは違って、平和や愛というモノにはカタチがない。

小学六年生の時、平和学習で戦争をしていた頃の日本を知った。語り部さんの話を聞いたり、広島資料館に行って原爆に関する展示物を見た。けれどそれ以上のことは何も知らない。原爆で肌が焼け爛れた感覚とか、一瞬の間に多くの命や住む場所を失った人たちの思いを私

は知ることができない。そんな経験をしたことがなくせに、後から知った事実だけを背景に「今の世の中は平和だ」と言い切ることは、私にはできないのかもしれない。

そもそも日本はいつ平和になったのか。戦争で降伏を認めた時だろうか。アメリカと講和条約を結んだ時だろうか。それとも終戦を迎えてから何年も経った後だろうか。カタチとして存在しないモノには、そのものの変化する瞬間を目で捉えることができない。これは愛というモノにも同じことが言えて、赤ちゃんの頃にもらう名前、抱っこされることやお乳をもらうことも生まれて初めて人からもらう愛でさえカタチがないのだ。

カタチとして存在しない平和と愛との間に共通点を見出すとすれば、それは人の心によって創り出されているというところだと私は思う。争いがなく平穏であってほしいという思いから平和が生まれ、何かを好きになったり大切にしたいという思いから愛が生まれるのではないだろうか。逆に言えば、この世の中を自分の思うままにしたい、支配したいという気持ちで誰かが武器を持ってしまえば、そこに平和はない。人に寄せる想いがなければ

ば、そこに愛はない。つまり、カタチなきモノは人の心次第で形成されることもあり、その一方でガラスや絵の具と同じようにいとも簡単に姿を変えられてしまうのだ。

カタチとして存在しないものほど私たちの社会をより豊かにする大切なモノなのかもしれない。しかし目で捉えることができないからこそ、いかにそれらが重要性を秘めているのかを日常生活の中では実感しにくく、存在自体の認識が薄いだろう。けれど私たちにはこれらのカタチなきモノを表現することができる。

たとえば作曲家のように今までにないメロディーやリズムで、カタチとして存在しなかった音楽を一つの曲としてその存在を際立たせることができる。これと同じように平和や愛にもカタチがなくてもその存在を表現できるはずだ。表現の仕方は人それぞれだし、おそらく一つだけではない。私はその表現の仕方の一つとして笑顔が挙げられると思う。人が幸せを感じて自然と笑顔になるように、これが平和だとか愛だとか口に出さなくても、それらを感じた時に笑顔になるのではないかと思う。だから笑顔が溢れるところには、単なる幸せだけでなく

きつと愛もあり、それ自体が平和を表現しているのかも
しれない。

カタチとして存在しないモノほど扱うのは難しい。たとえそうだとしても、それが人の心によって創り出されているモノならば、それはカタチのあるガラスよりもその先が見えるくらい透き通っているように美しく、絵の具よりも鮮やかであると私は思う。



◆ 高 校 生 の 部 ◆

佳 作

私たちの本能

東京都

東洋英和女学院高等部 二年

あぶら き
油 木 理緒奈

戦争は例え終わっても、国家間やその国民の間に生じた亀裂はなかなか埋まることはない。私は最近、これを肌で感じる出来事を経験した。

昨年私は、数ヶ月間アメリカに留学する機会が与えられた。現地の高校に通っていたのだが、そこには中国からの留学生も十名程かよっていた。彼らは皆愛想が良く、新入生の私にニコニコと話しかけてきてくれた。しかし、私が日本から来た、と知ると、間髪入れずに、ある質問を投げかけてきた。日本では、歴史の授業でどのようなことを習うのか、と。私は最初啞然としたが、何人もの人に同じような質問をされたので更に驚くことと

なった。

ところで、私はまた別の出来事もアメリカで体験した。それは私のホストファミリーと夕食をとっていたときのことだ。ふと何かの拍子に第二次世界大戦の話となった。私が、自分の祖父母が食糧難で苦しんだ、という話をしたところホストシスターに、でも先に仕かけたのは日本ではなかったかと、指摘されたのだ。口調こそ強くはなかったものの、白人のアメリカ人に四方囲まれ、そのときなんともいえない心情に襲われたのは確かである。

私が中国の生徒の質問に言葉を失ったのは、きっと一つにまだ会って間もないような私にまで歴史問題をふってきたからであり、そして更に彼らの言い草から日本では事実が教えられていないと彼らが思っている、と私自身が感じたからであろう。そして、啞然としたのちに憤りを覚えてしまった自分もいた。私は刹那的に、日本をかばい、相手を責めるような気持ちになっていたのだ。この心情こそが戦後七十年以上の時を経てもなお日本と近隣の国々との衝突が絶えない原因なのかもしれない。よく考えてみれば、私が日本の学校で真実を学んできたと思うのと全く同じように、きっと彼らも自国の教

育を正しいのだと信じて疑っていないのだと思う。また、加害者と被害者では、同じ出来事でも解釈に相異が生じることは大いに考えうる。だからどちらか一方が絶対に正しくて、どちらかが間違っている、ということはないのであろう。私たちは、自らの「正義」や「信条」を一度取り上げて、互いに歩みよらなければならぬ。

しかし一方で、生きている限り人間には大なり小なり争いはつきものなのだろう。すなわち、自分個人や自国をかばおうというのは人間の当たり前の心理なのだと思う。だからこそ私たちは、細心の注意を払って理性をもつてこれをふうじこまなければならない。

ホストシスターの発言も自然な発想であるといえる。しかし、彼女の発言からも、なぜ世界から争いや戦いが絶えないかが読みとれると思う。この発言の背景には、先に戦争を仕掛けたのは日本なのだから日本の人は苦しんでも当然だという種の冷酷さと、戦争を仕掛けた相手への不寛容さがうかがえる。そこには、相手国にも自分と同じような善良な市民がいるという思いやりはない。確かに、多くの人は「やられたらやり返し」たくなるだろう。しかし、何らかの闘争が起こりそうなときや、

相手への憎しみが生まれつつあるときにこそ、想像力を働かせて相手の立場に立って、相手を慮ってみることが大切なのではないだろうか。これが国家間で実現したときには、必ずや平和な時代がやってくるのだと思う。そのためには、月並みな言葉ではあるが、私たち一人一人が他者を思いやることが平和への第一歩となるのだろう。

敵をどうしても許せない気持ちや、自分の正義を貫きたい気持ち。このようなある意味当然で本能的な心情を制御することでこそ、争いのない世界を実現できる。私にはそう思われてならないのである。



最優秀賞

60年前の手紙から

島根県

狩^か
野^の
典^の
彦^{ひこ}

戦後復興の姿を世界に伝えた東京五輪から半年後、隣家の大廻臯氏は自らも戦後に区切りをつけるかのよう
に、町役場の支所長を最後に退職した。それから、自
宅の牛舎で搾った牛乳を配達する途中、我が家に寄って
は毎日のように私の祖父母と茶飲み話に興じ、穏やかな
笑い声を発する近所のやさしい御隠居さんだった。子ど
もだった私は、大廻氏の晩年のそんな姿しか知らなかつ
た。

ある日、近所での大人の世間話から、大廻氏が戦時中
に山口県にあった捕虜収容所の所長だったこと、そして
捕虜虐待の疑いにより東京の巣鴨プリズンに収監された

ことがあると知った。戦犯だったという事実を聞くだけ
で、世間は大廻氏にダーティーなイメージを抱くことが
あったかもしれない。人間を凶器にも鬼にも変える戦争
は、こんな穏和なお爺さんの人格も変えてしまったのか
……子どもながらに、私もそんな風に思っていた。が、
それは間違いだった。大きな間違いだった。

昭和二十一年六月、BC級戦犯容疑で逮捕された当初
の大廻氏は、「戦時の収容所の悪条件を思えば当然で、
仏教に云う因果応報の様な観念した感じで過ごした。他
の戦犯のように心を悩まさなかった」と自責の念を手記
に残す一方、拘置中に作った数え歌の冒頭では「一つも
虐待しないのに戦犯容疑者と名をつけて巣鴨入りとはな
さけなや」と詠んだ。戦時収容所の劣悪な生活環境を所
長の立場で申し訳なく思うことはあっても、逮捕容疑が
虐待だとは思ってもみなかったのだ。言葉が通じず弁明
の機会がほとんど無いままに時間が過ぎていくと、その
不安を「ようよう調べが来てみたら何にも分らず又独
房検事の青眼がうらめしい」とも詠んだ。

いつまで続くか分からない自身の戦後生活の中で、一
日一日何かを書き綴ることで自分の心と体を保とうとす

る姿が、遺された膨大な手記から伝わってくる。

泣くも嘆くも巢鴨の人よ

しばし辛かる涙をかくせ

遠い故郷のなつかし夢を

せめて心のなぐさめに

支えたのはこの歌のように、何よりも故郷の大切な人
を思う気持ちだったに違いない。

そして、父の帰還を家族が待ちわびた童謡「里の秋」
の願いが叶うまで、逮捕から二年二ヶ月を要した。元よ
り大廻氏の地元での信望は厚く、まもなく診療所に職を
得て生活は安定したものの、捕虜虐待を理由に有罪と
なった事への無念の思いは、巢鴨出所から十年が経って
も引きずったままだった。

そんな昭和三十三年、大廻氏が所長をつとめた本山捕
虜收容所（山口県山陽小野田市）にいたという英国人が
ロンドンの日本大使館に手紙を宛て、その内容が大廻氏
の元にも伝わってきた。差出人のファールブローザー氏
の名に記憶はなかったものの、手紙には思いがけない言
葉が散りばめられていた。「大廻中尉は大きな危険を冒
して病人にしばしば追加食料を与えてくれた。人々の苦

痛を軽くする多くの心遣いをしてくれた。」「映画や本で
の虐待の世評は違う。少なくとも大廻中尉は敬うべき軍
人であり、かつ紳士だった」「私は彼の下にあった三百
人を代表して、彼が全部の人から大いに尊敬されていた
ことを確信できる」などと綴られ、捕虜に対し人間とし
て且つ軍人としての尊厳と名誉を守ってくれた大廻所長
への敬意が文面に込められていた。

終戦から十年以上経ちながらも、わざわざ手紙をした
ためてくれた英国元軍人の情に胸が詰まり、巢鴨出所後
も包まれていた大廻氏の無念の靄に陽が射した瞬間だっ
た。

同じ頃、島根県は四百名を超える戦争未帰還者の氏名
を挙げて、その安否を尋ねる一面広告を新聞に掲出して
いる。その二年前の経済白書には「もはや戦後ではない」
との言葉が躍ったが、そんな風に割り切ることの出来な
い人々が、まだまだ多くいた時代だったはずだ。そんな
頃に届いた手紙は、周りから忘れられていく真実の記憶
を伝え、いまだ戦後に区切りをつけられなかった大廻氏
の背中を押してくれたに違いない。やがて役場の支所長
を最後に退職した後も、農作業の傍ら民生委員・児童委

員・生活相談員等にあつて、常に地域のために労を惜しまぬ姿があつた。

国と国の譲らない正義がぶつかり、裁かれる正義があれば裁かれない罪もあつたかもしれない。そんな困難な時代にあつても大廻氏やファールブローザー氏のように、立場を超えて人間としての優しさで向き合う人達がいた事実を伝えたい。世界中が今、閉鎖的なポピュリズムに呑み込まれそうな、そんな時代だからこそ。

ご遺族の厚意で遺された膨大な手記と英国からの六十年前の手紙に接し、見えにくい戦争の実態を知ることの難しさを感じるとともに、何事においても真実を知ることの大切さを今更のように感じている。



優秀賞

イランで考えたこと

島根県

山^{やま}尾^お一^{いち}郎^{ろう}

「戦時中の国を旅した？」振り返ると不思議な気持ちになる。一九八一年イランは領土問題をめぐってイラクと戦争をしていたが、私は大学卒業と同時に自転車でユーラシア大陸横断の旅に出た。

下関からフェリーで韓国の釜山に渡り自転車で走り出すことを考えたが、北朝鮮と国交はなく陸路で進むことができないために、シベリア鉄道でパリまで行き、フランスから日本に向かって走ることにした。しかし、友人たちは「戦争をしているイランは大丈夫か」と心配してくれるが、「もし、危険であれば国境が封鎖される」と気楽に応えていた。いつの日かすべての国が戦争を止め、

自由に往来できる日が来ることを願い「自分探しの旅」に出た。ナホトカからパリまでは車中十泊を要したが、ユーラシア大陸の広さを体感することができた。

一九八一年六月二十日パリを出発して、一万五千キロメートル先のカトマンドゥーをめざした。イラン入国は十月二十六日。トルコからイラン国境へは長い大型トラックの列ができていたが、国内では物資が不足し、多くの生活必需品を輸入しているのだろう。旅行者である私の荷物もすべてあけて確認され、最終的には入国することができた。現在、外務省が発表する海外安全情報では、渡航を中止する勧告に相当していたかもしれない。当時、アンカラの日本大使館でイランへの旅について訊ねると、「自転車をやめてバスで早くイランを抜けなさい」というアドバイスをもらった。

イランとイラクの戦争は、国境付近で油田の領有権をめぐって起きた。そして戦闘地域は、国境付近であり、パキスタンに抜けるルートでは爆撃は行われていない。しかし、いつ戦闘地域が拡大するかはわからない。確かな情報を獲得する手段もないので、早く自転車で走り抜けるのが得策だ。ものすごい音に反応して空を見上げる

と、戦闘機が飛んでいく。戦場に向かっていているのだろうか。臨場感は高まり、ペダルを漕ぐスピードは上がり、カトマンドゥーをめざす。

自転車で旅をしながら戦時国を実感するのは、検問の多さだった。百キロメートル走れば、二、三回止められた。そして、自転車のバッグの中も調べられ、すべてを出して再びパッキングするには時間もかかり嫌だった。戦時国を旅しているサイクリストには、我慢しなければならぬことだと頭でわかっているけれどもいつも不満顔で対応する自分がいた。

首都テヘランでたくさんの軍人に会ったが、私のイメージする背筋が伸び、精悍な顔つきな人とはほど遠い軍人にも出会った。目が泳ぎ、顔の表情も緩み、麻薬の常習者と疑いたくなるような軍人もいた。人が人を殺す行為を正常な人間の感覚ではできないので、麻薬の力を借りているのだろうか。そのような状態まで人間を追い込む戦争を、なぜ行うのか、考えさせられる。

イスワファンでは、空手を習い日本びいきの大学生に泊めてもらった。その家は、国境近くのアバダンから戦争を逃れての疎開先だった。食事は炊き出しが行われ、

私も行列に並びいただいた。学校は、地元の子どもたちが午前中に授業を受け、疎開の子どもたちは午後授業を受ける二部制、授業のない子どもたちは元気に町で遊んでいる。屈託のない子どもの笑顔は、戦争を忘れさせてくれる。

戦時国イランで考えたことは、憲法九条をもつ日本にできることは何か。そして、一人の日本人として何をすべきか。空を飛ぶ戦闘機を見ながら、自分は日本に帰り中学校の社会科の教員になることを決心した。社会科の授業で、憲法九条を持つ国の果たすべき役割について中学生と一緒に考えたい気持ちが強くなった。帰国後、中学校の社会科教員になり、「自由」「平等」「平和」について生徒と共に考えてきた。平和学習の実践では、夏休みに身近な人から「戦争体験の聞き取りレポート」を課題とし、生徒が、直接聞くことによって戦争を自分の問題としてとらえる機会にした。

いよいよ定年を迎える年になったが、近年盛んになった憲法改正論議を聞くと憲法九条が軽くなってきたように思う。憲法九条では「戦争放棄」「戦力の不保持」「交戦権放棄」が謳われている。世界で唯一の被爆国として、

国際平和を誠実に希求してきた自負が日本人にはあるはずだ。

一九八〇年代には、「自衛隊が合憲であるか？違憲であるか？」を考えながら世界平和について考える授業を組むことができた。憲法九条は時代に翻弄されてはならないはずだ。一九四九年、永井隆博士が「平和塔」に記した「憲法で戦争を放棄する」と言い切ったのだから、人々の心の中から戦争欲をすっかりなくしてしまわなければならないぬ」の言葉の重みを忘れたくない。現代人は歴史から学ぶことの大切さを肝に銘じなければならない。



佳作

祖父の願いを未来へ

島根県

和久利わくり
裕ゆう
大た

私には今年八十九歳になる祖父がいる。幼い頃の私にとって祖父は家族の中で最も親しい存在だった。よく一緒に風呂に入り、寝るときも一緒に、祖父の腕を枕に寝ていた。祖父は元海軍軍人であったが、堅苦しい雰囲気は全くなく、人当たりがよくて世話好きで、周りから頼りにされている人だった。祖父はあまり戦争体験を自分から語ることはなかった。

ある晩夏の午後のことである。その日は家族で農作業の後、縁側で一緒にお茶を飲んでいる時だった。どんなきっかけがあつたのかは憶えていない。私はふと「おじいちゃんって潜水艦に乗ってたんだよね。どうだった

の？」と軽い気持ちで聞いたことは覚えている。祖父は青々と茂る紅葉の若葉をみつめ、何とも言えない寂しそうな顔をして、「あの頃の潜水艦はな、鉄の棺桶と呼ばれていてな。出撃したら最後、もう帰ってはこれんと思っていた。おらの乗った潜水艦は昭和二十年九月の出港予定だった。」と一気に吐き出したそして傷だらけの両手の甲を見せてくれた。「これは凍傷のあとだ。冬の訓練でやられたんだ。」と教えてくれた。それ以上私は言葉を継ぐことができなかった。一緒にいた家族も無言で聞いていた。それくらい祖父にとって戦争体験は重いものだったのだと思う。

祖父は昭和四年生まれで、十五歳の時に海軍に年少兵として志願した。終戦時は呉で伊号第十四潜水艦に魚雷整備の担当として乗り組んでいたそうだ。後になって祖父の妹から祖父の戦争体験を聞いたことがある。中でも驚いたのは広島の子爆弾投下を目撃した話である。八月六日朝、祖父は潜水艦の甲板の上で朝礼をしていたそうだ。突然空が光り、あまりの眩しさに目を手で覆うと、直後に顔の皮膚が熱でヒリヒリする感じがしたそうだ。目を開けると山の向こうにキノコ雲が上がっているのが

見えたという。

祖父は数年前脳の病を患い、現在寝たきり生活を送っている。祖父が寝たきりになる前よく言っていたことがある。「おれは十五で海軍に入った。終戦後も兄弟を食わせるためにそのまま働いたから、今のお前たちのように学校に行って勉強をすることができなかった。だから勉強できるっていうことは幸せなことなんだ。しっかりと勉強して、おまえの好きなことをしなさい。そして将来世のため人のために働ける人間にならなさい。」と。

地元の高校を卒業した私は大学で幼児教育を学び、保育士となった。現在は雲南市内の子ども園で働いている。働き出して今年で十年目になるが、最近祖父の言葉をよく思い出すようになった。私はこの平和な時代に生まれ、次世代の子供たちを育てるというやりがいのある仕事をしていることに、心の底から幸せを感じている。そしてふと思う。あの戦中戦後の激動の時代を無私の心でがむしゃらに生きた祖父のような先人たちがいたからこそ、今の自分たちがあるのではないか。十五歳当時の祖父は「世のため人のために自分は何ができるか」ということを必死で考えた末に海軍に志願するという道を選んだの

だろう。あの戦争の時代、不幸にもそのような選択肢しかなかったのだと思う。終戦から七十余年が経ち、日本は平和で豊かな国になった。本人の努力次第で好きなことが学べるし、自由に職を選ぶこともできる。しかしこの現在の平和で自由な日本は祖父たちが自らの血と汗で作上げたものに他ならない。今を生きる我々はそのことを忘れてはいけないと思う。祖父の私への願いの言葉は、悲惨な戦争の時代を生き抜いた多くの人々の願いそのものではないだろうか。

では、今の私にできることはなんだろう。それは祖父の願いを次の世代にも伝えていくことだと思う。私は自分が日々接する子供たちに好きなことを思う存分にしてもらいたい。この雲南市の豊かな自然環境の中で好きな遊びを楽しみ、いろんなことを学んでいてもらいたいと思ひ、日々接している。乳幼児期は学びの土台となる探求心や粘り強い心を育てる大切な時期だ。その学びへの意欲をもってその後の人生を生き、社会の中で自分の好きなことを選び、自分を表現していつてもらいたい。そうした一人一人の営みが相互に関係しあい、お互いが助け合って社会が成り立っていくのだと私は思う。「自

分の好きなこと」が人とのつながりの中で次第に、自然に、誰かの幸せを願う、自分も含めた「世のため人のため」に昇華されていくのではないだろうか。

祖父の願いを胸に一日一日を大切に生きていくこと、そしてその思いを子供たちに伝えていくことが今の私の生きる目標となっている。平和な時代に生まれたことに感謝し、これからも自分のできる精一杯のことを子供たちにしていきたいと思う。



第二十八回 島根県雲南市永井隆平和賞 最終選考作品一覧ならびに受賞結果

【小学生低学年の部】

氏名	テーマ	都道府県名	学校名	賞名
狩野 敦	平和のもとで心をつなげていく	島根県	雲南市立三刀屋小学校三年	最優秀賞
石飛 湊	人をたすけるって いいな	島根県	雲南市立三刀屋小学校二年	優秀賞
伊東 奈津	「如己愛人」の精神から学んだこと	島根県	雲南市立鍋山小学校三年	佳作
中村 楓花	あたり前じゃないしあわせ	島根県	雲南市立掛合小学校二年	佳作
糸川 想大	人と人とのかん係	島根県	雲南市立西小学校三年	
今岡 桜	わたしたちのコウノトリ	島根県	雲南市立西小学校二年	
加藤 想大	ながいたかしはかせから学んだやさしい心	島根県	雲南市立三刀屋小学校二年	
高尾 優奈	相手を大事におもふこと	島根県	雲南市立掛合小学校三年	
三島 大輝	あい手の気もちを考えるよ	島根県	雲南市立三刀屋小学校二年	
宮本 愛子	長崎にきぼうとゆうきを	長崎県	長崎市立山里小学校三年	

【小学生高学年の部】

氏名	テーマ	都道府県名	学校名	賞名
村尾 拓真	ぼくと祖父と博士	島根県	雲南市立木次小学校五年	最優秀賞
田中 鼓春	人を愛する気持ち	島根県	雲南市立西日登小学校六年	優秀賞
大家 凛	笑顔のプレゼント	島根県	雲南市立吉田小学校五年	佳作
勝部 瑛資	平和の基になる言葉	島根県	雲南市立阿用小学校六年	佳作
岩田 あかり	病気になつてわかったこと	島根県	雲南市立吉田小学校六年	
景山 柚葉	伝える勇氣	島根県	雲南市立三刀屋小学校四年	
武繁 羅生	忘れない出来事	島根県	雲南市立三刀屋小学校五年	
錦織 夏実	戦争—そしてこれから	島根県	雲南市立海潮小学校六年	
渡部 詩子	戦争の恐ろしさに向き合つて	島根県	雲南市立大東小学校六年	

【中学生の部】

氏名	テーマ	都道府県名	学校名	賞名
谷 成葉	壁の外側で	広島県	ノートルダム清心中学校三年	最優秀賞
久武 梨緒	平和を思う	山口県	下松市立久保中学校二年	優秀賞
伊禮 彩花	繋ぐ平和	沖縄県	八重瀬町立東風平中学校三年	佳作
岩崎 大地	平和とは	島根県	雲南市立三刀屋中学校二年	佳作
酒見 知花	如己愛人ゝ生きてこそゝ	広島県	盈進中学校三年	佳作

綾部 友哉	僕の願い	山口県	下松市立久保中学校二年	
岡本 和奈	本当の平和をもたらすもの	広島県	ノートルダム清心中学校三年	
澁谷 千樺	「好奇心」と「好奇の目」	広島県	ノートルダム清心中学校三年	
結城 太志	爪痕から確かな平和へ	沖縄県	石垣市立白保中学校二年	
湯野 遥佳	愛でつながる、心と命	広島県	ノートルダム清心中学校三年	

【高校生の部】

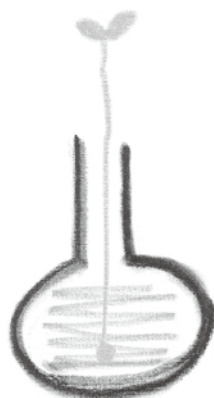
氏 名	テ ー マ	都道府県名	学 校 名	賞 名
二木 理沙子	八月九日に生まれて	神奈川県	桐蔭学園高等学校女子部三年	最優秀賞
横山 公香	私たちは平和を手に入れられるのか	東京都	東洋英和女学院高等学校二年	優秀賞
浅野 栞菜	モノのカタチ	島根県	島根県立松江南高等学校一年	佳作
油木 理緒奈	私たちの本能	東京都	東洋英和女学院高等学校二年	佳作
大森 咲季	温もり	島根県	島根県立三刀屋高等学校二年	
木村 花蓮	言葉	島根県	島根県立三刀屋高等学校二年	
中山 純花	この平和の行く末は	東京都	東洋英和女学院高等学校二年	
錦 織歩香	愛	島根県	島根県立三刀屋高等学校二年	
持田 礼菜	愛のわざは平和のわざ	東京都	東洋英和女学院高等学校二年	

【一般の部】

氏名	テーマ	都道府県名	賞名
狩野典彦	60年前の手紙から	島根県	最優秀賞
山尾一郎	イランで考えたこと	島根県	優秀賞
和久利裕大	祖父の願いを未来へ	島根県	佳作
安倍秀賢	この世界で生きるということ	山梨県	
神山美奈	平和はあなたの笑顔の中に	長崎県	
川内七海子	如己堂にて	長崎県	
田中春菜	平和の種子はわたしの中に	長崎県	
成本孝宏	鳴り止まない『長崎の鐘』	埼玉県	
新田和幸	祖父の残した手紙	島根県	
能村正徳	「生きてきてよかった」	広島県	
安村太智	願い	福岡県	



NO



YES

KU
2007. 8. 26